

魅せられて綴る藩文学(十二)

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

(会員 佐伯市中村北町)

咸宜園に遊ぶ書生達は、必ず登山して誌作している。淡窓は、詩作教育の必須条件として、彦山の情景を詩作させたかのように、彦山の詩を多く見ることができ。また、森厳な霊山の上宮を賦した詩がその二詩である。(前掲)

五月 二十日 蒲池久市偶至。因招佐藤玄猷。及益

多。謙吉。一溪。亨。研介。一九郎。

同會賦誌。未暮而散。

詩会に飲食を用いずとしたのは、此の会を以て始とした。今日まで詩会には、必ず飲食を友としてきたが、この会をもって用いずと約した。

二十四日 赴佐藤玄猷招會方山元台後園新居。

會者。益多。謙吉。一溪。亨。研介。

一九郎。館林清記。熊谷見順。児玉

茂。日入而歸。

二十五日 改月旦評。益多加七級下。謙吉加五

級下。亨・研介加四級下。(以下略)

淡窓曰く、月旦評有るより此の等級に昇る者は、益多を以て始とす。また、月旦評を作つて今日まで十六年になるが、六級上を以て至極の地とし、この至極の地に至つたのは前後只五人、諫山安民、小關亨、館林伊織、僧大龍、相良茂であった。此に至つて始めて七級あり。と益多の俊才を高く評しているように、益多は宜園の一頭地を為したのである。

なお謙吉(旭莊)は、文化十三年八月に十歳で一級に進み、三年目の十四歳で五級下に昇進したことは、誠に目を見張るものがあり、今後益多に勝るとも劣らぬ人材として注目されるに至つた。

また、研介、文政二年四月十二日入門以来、一年にして四級下に昇進した。岩国にあって穎才の人であったと

察せられる。

七月

八日 晒書。午後暴雷雨雹。

九日 府君有命。令諸子婦。以嚴君疾。往

祈石松村觀音。予詣府奉命。與妻及

久兵衛妻。仲平。謙吉等皆往。合門

生。婢僕。殆二十人。(中略)府君

送賜飲酒菓類。入夜而歸。晒書。

十九日 尚書卒業。

益多が四月二十二日に起した尚書講卒業。

二十日 使益多代講韓非子。

二十四日 益多。屯之杖立村。廢韓非子講。

是日淡窓は、韓非子講を廢して、益多・屯を伴つて杖

立村へゆく。

八月

四日 益多。屯歸塾。午後與諸子會佐藤玄

猷宅。會者。益多。謙吉。无爲。鼎

亨。研介。一九郎。一平。三七郎。

元吉。蒲池久市。釋虛白。日人歸家。

五日 使益多起韓非子講。

十二日 午後諸子會艸堂。謙吉。无爲。一溪。

亭。一九郎。三七郎。元吉。小三郎。

蒲池久市。釋惠禪。虛白。佐藤玄猷。

熊谷昇。山鹿良甫。益多。向蒼而散。

二十四日 児玉茂。益多。謙吉。鼎。頼之。无

爲。研介。一九郎。三七郎。元吉。

二十六日 児玉茂將遊長崎熊本來別。

児玉茂、兩肥遊学のため來別。

二十九日 病後始詣官府謁府君。是日始設文會。

淡窓体調整わず、講を廢した先月十六日以来、始めての

文會を開いた。會は、益多以下数人であつた。

晦日 放學。詣府謁府君。歸到魚町。門生

十五人在此相待。遂同詣石松。

此日、府君に謁して魚町に替る途中、門生益多以下

九月 五日 俊良之肥後學醫。告別。午後赴魚屋

長八招。益多。玄通隨焉。供酒。鹽

屋平右衛門伴客。飲畢。講小學數章。

老幼來聽者十餘人。晚飯畢而歸。

九日 放學

十三日 夜招益多。享研介賞月。過三更而寢。

是夜月色清朗。

今宵は折しも中秋の名月、淡窓は益多・亨・研介を招き、三更に至るまでひととき世俗をはなれ、天を敬い月色を称えた。

十六日 聞原震平來隈町。使益多往問。

二十三日 午後原震平携女采蘋。門人□□□□

來訪。因招飯田呼傳。佐藤玄由(猷)

同會。使益多陪客。釋虛白。熊谷見

順亦來。供酒及飯。二更而散。

二十四日 詣府謁府君。使益多之原震平館謝。

震平亦使□□民來謝。

二十八日 晚與益多。研介小酌於樓。二更而散。

晦日 午後之魚町。三松靜壽使賴之來迎。

遂往。座客。原震平。采蘋。僧虛白。

既而益多亦至。飲酌到二更。

十月 三日 午時賽羽野今毘羅祠。益多。謙吉。

无爲。和市隨焉。眺望頗佳。令飲廊

下。日暮歸家。温酒小酌。至二更而

散。

四日 關西社詩稿二編脱稿。

この日会期、社友至る者無く、熟成數輩と詩を賦した。

二十六日 改月旦評。研介加四級下。一溪加四

級上。

二十九日 韓非子卒業。使益多開徂來集講。

十一月 四日 中庸卒業。已牌。會蒲池久市宅。益

多。无爲。一溪。亨。研介。並衛。

頼母(和市改称)。泰助從焉。謙吉。

頼之。僧虛白。亦來會。日入返家。

八日 放學。

二十八日 朝起。雪壓園林。簷懸氷柱。山野皓

白。與朝光相射。景太佳。嚴君來賞

雪。供飯。遂招益多。一溪。伯父。

夜同供蕎麥。二更而散。

昨日、雨雪まじりの旋風がふきまわった。今朝起きてみると、庭園の樹林に圧するが如き積雪と、家屋の簷に

水柱が懸かり、日田盆地は見渡す限り白一色に染まり、朝日の陽光の輝きは絶景であった。

師走の声を聞くや、一昨日の大雪に追い打ちをかけるように、二日夜に入つてまた大雪が降りしきり、悪寒益々甚しく、講を廃す日が続く。

十二月 七日 夜棕野元碩。春水來訪。既而嚴君與

衛藤俊策來。呼益多與話。最後叔父來。過三更而散。

二十五日 児玉茂自長崎歸來見。夜鍋屋成策齋

鷄鮭來訪。與東西菴南北。益多同飲。

至夜半散。

去る八月二十六日、長崎熊本に遊学していた児玉茂が、四月ぶりに帰つてきた。夜鍋屋成策が鷄酒を持つて來たので、東西菴南北、益多と共に馳走になった。この東西菴南北は江戸の人で、嘗て漂流して漢土に到つたことがある。去る九日來訪して、自ら体験した唐山漂流中の事について、門生・住民に語り、また、講業・詩会に出席され、淡窓は賓客として遇した。

晦日 之官府賀。夜驗君來守歲。叔父同東

西菴南北亦會至。益多。屯。亦在焉。

供蒿麥。是歲塾生守歲者。十八人。

(益多以下十八人)

文政四年(一八二二) 淡窓四十歲。益多二十一歲。

正月 三日 使益多起但來集講。无爲起蒙求講。

反雇婢。起詩講。

淡窓の病昨日に變らず、医薬を服す状態であつた。

よつて益多但來講を、无爲蒙求講を起す。雇婢反て詩講

(國朝詩別裁鈔録)を起した。

五日 攝州僧大觀來謁。會門生觴之。凡三

十八人。(児玉茂。益多。謙吉。无

爲。並衛。頼母。……略)

八日 作贈東西菴南北詩二首書贈。

約一ヶ月、隈町に寓した東西菴南北、この日詩二首を

贈つて去つた。

春宵一夢到中華。醒後何妨對客誇。

袖裏遺芳君看取。孔林攀得一枝花。

十萬里程凌怒濤。身經九死氣何豪。

可憐胡賊淋漓血。猶染腰間日本刀。

十三日 赦春水來學。謁大原山。及宮太夫神

廟。益多。李之助。吏山。春水隨焉。

既歸上塚。(略)

十九日 使益多代謙吉國語講。

謙吉、去る十五日より湿瘡の為、益多代つて國語講をなす。

二十二日 以病未愈。不能上塚。益多有疾。廢

徂徠集。國語講。

淡窓の病未だ以てなおらず、また益多も疾み、謙吉も疾瘡治らず休講した。

二十三日 起毛詩講及國語講。

益多代つて講起す。

二十八日 使益多起國語講。休講二日

二十九日 使益多起蒙求講。休講三日

正月の中旬より風邪が流行し、塾生達の休講も多く、講業が思うにまかせなかつた。

二月 朔 起毛詩講。休講六日。使先爲起孟子

講。休講五日。

二日 使益多起徂來集講。休講九日。

七日 改月旦評。(略)

前月の月旦評を、十日遅れの是日に改める。淡窓、門生皆病の為。

八日 新築上棟。招三侯遠江作祭。供酒飯。

工人役夫皆供酒。久兵衛來幹理其事。

前年十二月二十九日、西塾狭く書塾を建議し、秋風菴の北に建築起工式を行い、是日上棟した。

十日 反雇婢。伸平來。供午飯。使益多代

弔丸屋幸右衛門。

二十一日 深海龜六。自筑前至來訪。供酒及飯。

使益多佐酒。麻生伊織來訪。

三月 朔 使益多詣嚴君。及宇都宮正藏賀。嚴

君疾如昨云。予疾亦如昨。

五日 新塾略畢功。名爲東塾。

新塾落成、東塾と名づけた。淡窓は落成を祝って、毛詩講起し柿落とした。會者、内外の書生三十餘人。

二十二日 使益多開老子講。使謙吉開十八史略

講。

二十八日 益多有疾廢老子講。

四月 朔 益多去塾寓長兵衛家。養痾也。

先月二十八日、病の為老子講を廢して五日目、医者に長引く病と診斷され、益多病氣療養のため長兵衛家に寓することにした。

七日 社友携酒肴來訪。賀東塾落成也。因會

于東塾。座客。三松靜壽。館林清記。

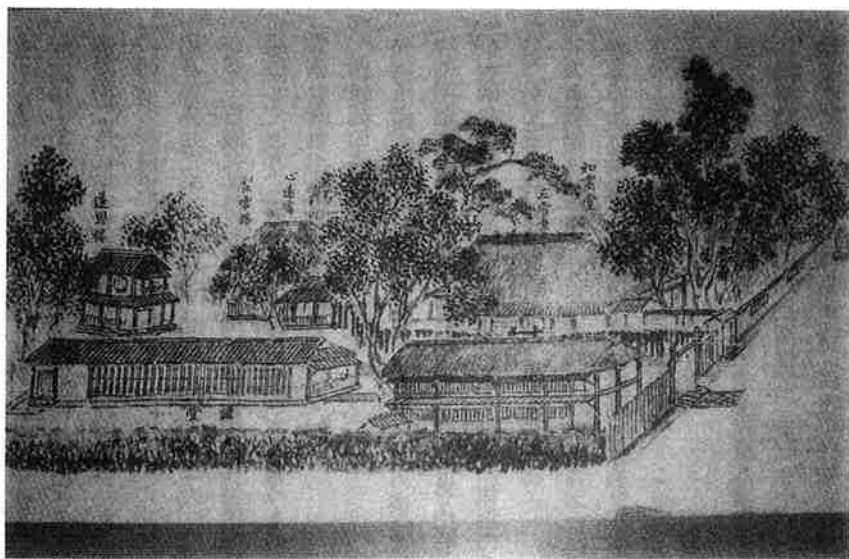
佐藤玄猷。熊谷見順。釋虛白。蒲池久

市。因迎清末二客同會。益多。研介。

頼之亦侍。

十二日 嚴君召賜麥飯。延谷梅亭來見。益多起

老子講。夜嚴君來供飯。



(咸宜園東塾)